

S. ターケルの視点からオーツを読む

Analyzing Joyce Carol Oates's Works by Invoking Studs Terkel's Point of View

松 尾 祐美子

短編集 *By the North Gate* (1963) 以来、およそ半世紀にわたりアメリカ社会を題材としてきた Joyce Carol Oates (以下、オーツ) の作品と、*American Dreams: Lost and Found* (1983) の著者 Studs Terkel (以下、ターケル) の作品は、執筆の時代が重なっている。オーツの作品は実際の事件にヒントを得ながら、アメリカ社会の諸相を写しだし読者の眼前に提示しようとしたフィクションであり、ターケルの著書は、多様な階層のアメリカ国民に取材し、彼らの夢の、光と影を映し出したノンフィクションの労作である。そこで、本稿ではターケルの視点を援用しながらオーツの作品に見られるアメリカン・ドリームを読み解いていくことを試みた。なお、本稿は、博士論文の序にあたる部分である。

キーワード：アメリカン・ドリーム、移民、家族、フェミニズム。

目 次

- I はしがき
- II 創作の傾向と作家の環境
 - 1. 創作の傾向
 - 2. 作家の環境

I はしがき

オーツの作品には暴力、不条理、強迫観念などが描き出される。社会の不条理、生きていくことの不条理を訴える手法はナチュラリズムともリアリズムとも評される事が多く、資本主義社会のひずみを暴き、大恐慌以降の底辺の白人を多く描く。登場人物の出自は多様で、季節労働者や白人の貧困層を含む労働者階級から大学の教授や弁護士、医師に代表される知識階級までと範囲が広い。自然の脅威になすすべもなく立ち尽くす農夫、下層階級から成り上がり富を手に入れる女性、富と権力への欲望やアメリカ社会の矛盾を読者に提示する。こうした社会の背景にはアメ

リカン・ドリームへの希求が潜んでいると考えられる。

一方、スタッズ・ターケルは、後にオーラル・ヒストリーと呼ばれることになる手法を確立したインタビューの名手であり、1984年には『よい戦争』でピューリッツァー賞を受賞した。このターケルの著作の一つに『アメリカン・ドリーム』（1980）がある。様々な階層や人種（或いは民族）を超え一貫して市井の人々に取材しており、その声を聴くことで、第二次世界大戦後の経済上昇で拡大したアメリカン・ドリームが、泥沼化したヴェトナム戦争や公民権運動の影響により1970年代には失速していく様子を伺うことも可能である。タイトルが示すとおり、アメリカ人になった人々も含め、様々なアメリカ人の失われた夢や見つけた夢に満ちている。

オーツの執筆活動の時期がターケルの著作の時期と重なっていることは、オーツの作品に表されたアメリカン・ドリームを読み解く手段として有用であろうと思われる。というのも、オーツは様々な事件や事象が持つ社会的側面に光を当てて輪郭を鮮明にすること、繁栄している社会の裏側で実際に何が起きているのかを作品という形で読者に提示し読者自身に考えさせることを目的としているからである。その背景には、この社会の変化そのものを知悉した作家の声が響いているに違いない。本稿は、ターケルの視点を足がかりにオーツの作品を読み解く試みであり、博士論文提出の前段階としてまとめる論文の序に当たることを、お断りしたい。

II オーツの環境と創作傾向

1. 創作の傾向

1963年に短編集 *By the North Gate* を発表して以来今日まで、小説、詩、戯曲、評論など精力的に手がけている。現代アメリカを代表する作家であり、執筆活動は極めて旺盛で、多作であるゆえにもっとゆっくり書いてはいかがだろうか、などと諷する人もいるが歯止めはかかりそうにない。

作風に対する評価では、リアリズム的、ナチュラルリズム的な手法の伝統を受け継ぐと言われ、時にはアメリカン・ゴシックの系譜に属すると言われることもある。執筆の幅の広さ同様、評価にも幅のある作家といえるだろう。また、作品中の暴力描写の多さが批判の対象となってきた作家でもある。暴力と狂気は、この作家の作品を著す言葉としてしばしば目にする言葉であり、オーツと暴力は切っても切り離せないと一般的に受け取られている。その激しさはときに読者を辟易させるほどである。ことに、突然噴出する暴力は、張り詰めた緊張が平凡な生活の中で徐々に高まっていった結果、限界に達したときに起きている。緊張が解ければ、その後に待つのは大方の場合弛緩であるが、だからといって、そこに幸せな結末が待っているわけではない。登場人物に救済は与えられず、予測不可能な状態のまま取り残される終わりに不安を感じる読者も少なくはないであろう。たとえば、全米図書賞 (National Book Award) を受賞した初期の代表作 *them*

S. ターケルの視点からオーツを読む（松尾祐美子）

においてデトロイト暴動が描かれている。暴動とは、多人数による暴力の発露ということであるから、登場人物個人の体験として書かれたとしても、作品の主たるテーマの一つとして考えられるだろう。そしてその傾向が20年近く続いていたこと、あるいは、そう受け止められる作品が多かったことは、*The New York Times Book Review* 紙に掲載されたオーツの記事“Why Is Your Writing So Violent?”からも推察できる。

この記事は、1980年5月、ワルシャワ大学におけるインタビューの様子を再現する形で始まっている。その中でオーツは、暴力を取り上げる原因として作家個人の経験や子供時代の経験と関係があるのかどうかという質問は、表現の違いはあるもののこれまでも様々な状況で問われてきており、その内容は「暴力沙汰の多い街として知られるデトロイトに住んでいたから暴力シーンが多いのではないか」、或いは「不遇な子供時代を過ごしたため人生に対してある種の脅えがあるのではないか」というものであることを明かした。さらに「ジェイン・オースティン（Jane Austen）やヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）のように、もっと家庭的なことや個人的なことを書いてはいかがですか？」とか、「社会哲学のような大きな問題は男性に任せてはどうですか？」などと直接自分に向かって言われたと述べ、そのような質問は「もし、ジェイン・オースティンやヴァージニア・ウルフがデトロイトに住んでいたとしたら、自分のおかれた環境などは超越して暴力のかけらすら感じさせない小説を書いただろうと言っているようなもの」だと答えた。そして、「馬鹿にしているし、何も分かってはいない。性差別的とも言える。」と結論づけた。オーツの執筆目的は暴力そのものを描くことではない。「私の作品が必ずしも、暴力を露骨に表現しているわけではありません。たいていの場合は、暴力という現象とその結果を描きます。」と本人が述べるように、彼女にとっての暴力は、その背景に存在するさまざまな問題の具現であり、帰結である。オーツは、暴力という形をとる現象に焦点を絞り、その現象が持つ社会的側面に光をあてて輪郭を鮮明にすることを心がけている。先述したように繁栄している社会の裏側で実際に何が起きているのかを読者に提示することによって、読者自身に考えさせることを目的としているのである。結論や結果が曖昧で、宙に浮いたような形で読者を取り残すとも言われるが、それは判断を読者に委ねることによって、オーツが個人的に取り上げた現象を、普遍的な問題として読者に再考させるためではないだろうか。

さらには、暴力の頻出と同様、受動的な女性の多さでも批判を受けてきた。フェミニストの中にはオーツの立場が曖昧であるとして、いらだちを隠せない者たちもいたのである。メアリー・キャサリン・グラント（Mary Kathryn Grant）が、オーツの描く女性を「愚鈍で、心も貧しく、美しくもなく、不道徳、要するに女らしさのかけらもない¹」と分析したのもその一例であろう。確かに、不安定な心理状態や潜在的な自殺願望を持っていたり、未熟な精神状態で精神分析医の治療を必要としていたりする女性などが多い。しかし、この意見に対しグレッグ・ジョンソン（Greg Jhonson, 以下ジョンソン）は、これらの批判は間違っていると以下のように反論し、オーツを擁護している。

オーツの目的に気づかないことは、作品に登場する女性たちの背景にある文化な土壌をさりげなく皮肉っていることに気づいていないということである。つまり、彼女たちは精神的に貧しいのではなく、崇高さに必要な人間性が欠けているとみなされること。美しくないわけではなく女性への嫌がらせや暴力ゆえに醜いということ。道徳的に破綻しているのではなく、心的な（道徳的な）成長を阻害され、聖女か女神やそれとも娼婦という分類しかない社会でやっと思き残ってきただけであること、である²。

ジョンソンの弁護は決して的はずれのものではない。両者の違いは、女性の有り様として分類される昔からの二大パターン、すなわち聖女か娼婦かというステレオタイプな考え方を押しつける社会を批判する表現方法の差ということである。オーツは声高に女性解放を叫ぶよりも、現実をそのまま切り取り読者に提示する方法を選んだ。初期の短編集が執筆され出版された1960年代は、第二波フェミニズム運動のまっただ中であつたことを考えれば、同時期に大学生活を送つたオーツがこの社会動向を知らぬはずはなく、それゆえ、全く影響を受けていないとは考えられない。加えて、進学したシラキュース大学での苦い経験もある。ルームメイトとも折り合いが悪く、独り部屋に移動せざるを得なかったこともあるが、ソロリティ (Phi Mu) に入会したオーツは、勉強するために時間を費やす代わりに部屋の飾り付けをしたり、男性社会の暗黙の要求に対し疑問も不満も抱かず唯々諾々と従つたりする大多数の同窓生の行動や態度をくだらないことと感じていたのである。“The Greek system”³とオーツは、相容れない関係でもあつた。作家を志すオーツと普通の結婚を夢見る他の学生とは所詮水と油の関係だったのかもしれない。このことをふまえて考えると、ジョンソンが、オーツは初めから女性問題については敏感だつたと言っていること、そして「オーツがフェミニズム的アレゴリーとでもいえる方法に大いに寄与している」(JCO 6) と分析していることにも同意できる。女性の解放を訴える女性が描かれていないことや、父権性社会に抵抗し戦いを挑む女性が登場しないことを理由にフェミニストではない、と判断することはできない。確かにジョアンヌ・V・クレイトン (Joanne V Greighton, 以下クレイトン) は、“Unliberated Women in Joyce Carol Oates’s Fiction”の中で、オーツがフェミニスト作家とは考えられないし、作品中に登場する女性が解放されていないと述べてはいるが、他のどの作家よりもずっと、解放されない女性の根元にある性というものを探求している⁴という見解を示してもいて、この意見はジョンソンの意見とも共通点を見いだせる。ここではオーツを反フェミニストとして非難している様子は見られない。なるほどオーツの作品中には、自立していない女性や自信のない女性、あるいは女らしくみせるということに異常に執着する女性が登場する。だが、家庭こそが女性の居場所と教育され、女らしく振る舞うことで男性の愛を勝ちとることを奨励されて育つた女性が、確かにこの時代には多く存在していたのである。オーツは決して正面切って反対する立場は表明していないが、これらの女性を描く作者の眼差しには反フェミニズム的というよりも、むしろ「このような女性の状況はいったい誰が作ったのか」という視点を看取することができる。敢えて欠落の提示をすることにより既存の体制を批判的に捉えるというアプローチで

S. ターケルの視点からオーツを読む（松尾祐美子）

はないだろうか。

オーツを弁明する側にも批判する側にも言い分はあるが、オーツをどちらかの側に分類してしまうことは難しい。なぜならば、彼女は女性も男性も等しく眺めることができるよう、女性問題の議論にはある程度の距離を保ち、偏らない視野を持つ作家だからである。ジョー・デイヴィッド・ベラミー（Joe David Bellamy, 以下ベラミー）のインタビューに対する「男性にとっては辛いでしょうね。生きているだけ、存在しているだけでもこの社会や自然界の“男らしさ”という基準を満たすようにしなければならないのですから。本当に大変だと思います。」（ベラミー, *Conversations* 20）という答も、そのことを示している。それゆえ、ウォルター・クレモンズ（Walter Clemons, 以下クレモンズ）が「オーツは机上の空論ばかり言うようなフェミニストではない。一人の作家であって自分が女性であることなど問題にしていなくて、ましてやそれを武器として使おうとも思っていない。」（クレモンズ, *Conversations* 38）と述べていることも、正鵠を射ているといえるだろう。

このようなオーツの態度ゆえに、フェミニスト批評家たちからは、いったいどちらの味方なのかと問われることも多かった。その点についてオーツは、“Is There a Female Voice? Joyce Carol Oates Replies” で、次のように述べた。

内容だけではきちんとした芸術作品を作れませんし、努力だけでも作れません。フェミニズムをテーマにしたとしても、感傷的で、弱々しく月並みな作品は女性にとってさえ価値のあるものにはなりません。逆に、フェミニズムではない作品、あるいは反フェミニズムのテーマだからといって真面目な作品の価値がなくなるわけでもないのです。内容は、単なる未加工の素材です。女性の問題、女性の見識、女性にとって特別な探求。こういうものが素材です。最も重要なのは作品の創造の方法と想像力の独自性です。（JCO 118）

オーツの執筆姿勢として、常に普遍的な立場に立ち、現代に生きる人々の不安感や無力感が都市のスラムであれ、高級な郊外の住宅地であれ、地方の田園地帯であれ、貧富や社会的地位の格差、年齢、性別の差もなく蔓延しているのだということを伝えようとしてきた。オーツの場合、想像が湧き上がるに任せ、溢れるイメージを醸成させた後に言葉で描くという方法をとっているらしいことは、「私のやり方は変わっているの。人はいるけれどいない、というような場所をぼんやりと夢想して…。そうすると、やがてすべてが整う時が来るから、あとはただ書くだけ」（クレモンズ, *Conversations*. 4）と述べていることからわかるし、アルフレッド・ケイジン（Alfred Kazin, 以下ケイジン）がオーツを Cassandra⁵になぞらえたことも頷ける⁶。ベラミーのインタビューに対して、自分はこれから書く小説に登場する人物のことを夢想していると答えたように、作品のことを考えているオーツの頭の中には、さまざまな見知らぬキャラクターがひしめき合い始め、その中で、架空の人物である彼らの方からその性格や個人的事情を明らかにしてくるということだ。そうすることによってストーリーが徐々に形を取り始めてくるのだという⁷。このような説

明は、御託宣を待つ巫女の姿を彷彿とさせ、また、作品の方がオーツを媒体として選び、示現するという印象を受ける。無論、ここで言っているのが神がかり的なことを指しているのではなく、あくまでも直感的な想像力、あるいは創意について認めていることについては言を俟たない。作品を執筆する前に、その作品背景となる架空の街の地図を描き、それを壁にピンで留めてイメージが湧くようにする、というオーツの手法も、その一例であろう。⁸ シラキユース大学には Joyce Carol Oates Archive があるが、ここにはオーツの草稿、手紙などが多数、保存されており、これらの資料からはオーツが執筆前に人物やプロット、背景などの周到な準備をしていることが明らかである。執筆プロセスは、想像力から創造力へとつながるものであり、豊饒な想像力が絢爛たる映像を作品に与えていることは否めない、そして、アメリカン・ドリームを体現した作品としての *Bellefleur* にも、その影響を見ることができる。多彩な思考や想像力が渦巻くオーツの世界の核にはアメリカン・ドリーム、家族、ジェンダーが存在していると考えられる。

2. 作家の環境

オーツは 1938 年 6 月 16 日、ニュー・ヨーク州エリー郡ロックポート郊外、ミラーズポート—バッファローの北東およそ 40 km、ロックポートからは南へおよそ 12 km、エリー運河が街の中を流れる—に、父フレデリック・オーツ (Frederik Oates) と母キャロライン (Caroline) の長女として誕生した。小学校⁹の教室が一つしかないような小さな町で、シラキユース大学進学までの子供時代を過ごしている。ルシンダ・フランク (Lucinda Frank) のインタビューに対し、貧しかったけれども幸せな子供時代だったと回想している¹⁰。しかし、この田舎の町では近親婚が多く、おそらくそのせいで、知恵遅れの子供が多数存在したこと、知恵遅れの子供たちは、年下の子供を虐め、オーツも例外ではなかったことも答えている¹¹。

両親は、大恐慌時代の多くのアメリカ人と同様、苦難の子供時代を過ごした。オーツの父、フレデリックは、アイルランド移民の家系である。ジャガイモ飢饉と呼ばれた大凶作が引き金となって、多くのアイルランド人がアメリカへ渡ってきたが、大半の人々にとってアメリカでの成功はおぼつかなく、低賃金で労働力を搾取されながらも、それ以外の選択肢を持たない貧しい人々が殆どであった。また、フレッドの母親ブランシュ・モーニングスター (Blanche Morningstar) の家系はドイツ系ユダヤ人であり¹²、そのことはブランシュの誕生当時から家族間の秘密であった。WASP (White Anglo-Saxon Protestant)¹³に属さなければ、アメリカン・ドリームは簡単に彼らに夢を与えない。フレデリックが二歳の時、父親は家族を捨てて出奔、以後ブランシュは、メイドとして働いたりロックポートの工場で働いたりしながら子供たちを育てる。しかし家庭的な不幸はフレデリックだけではなかった。彼の祖父母も同様である。祖父は墓掘り人夫で生計を立てていたのだが、病的に嫉妬深い性格であった。祖母は、その夫の嫉妬を煽るため、意図的に、帰宅する時間を見計らって寝室に愛人がいるように見せかけたそうである。その結果、祖母は逆上した夫にハンマーで殴打された。重傷を負いながら何とか夫から逃れ一命を取り留めたが、夫の

方は鉄砲で自らの命を絶ったのである。フレデリックが後年述懐して祖母は底意地の悪い憎らしい人間だったようだと言っている¹⁴。

一方、オーツの母方の祖父母スティーヴン (Stephen) とエリザベス (Elizabeth) は 1902 年にハンガリーからの移民として入国した。オーツの母キャロライナもまた父親との縁は薄かった。生後六ヶ月で父、スティーヴンを失ったのである。彼は短気な性格で知られていたが、その死亡原因は殴殺、原因は酒場での口論にあった。残された母子の生活を心配した叔父夫婦が申し出て、キャロライナともう一人の姉が彼らの養子となり、ロックポートに近いミラズポートの農家に移った。実母と残りの兄弟や姉妹も近くに住んではいたが、二つの家庭の間で常に疎外感を感じていたキャロライナは、成長するにつれ養子に出されたことを母親に遺棄されたと認識するようになっていく。実母や兄や姉たちとも心の通った交流はなく、養父母との関係に複雑な感情を持ちながら暮らしていた。ジョンソンがインタビューした際「私は、いわば除け者でそれが嫌でたまりませんでした。もう 1 人くらい育てることがなぜできなかったのでしょうかね。」(IW, 4) とキャロライナが答えたと言っているが、長い年月が過ぎても、親に棄てられた子供の悲哀は、しっかりと心に刻まれ消えることはないようだ。以上のことを概観すれば、彼らの不幸を招いた原因のおおもとに低所得ということがあると気づくだろう。父方の家系も母方の家系も、日常的な貧困と暴力に深く結びついているが、それは他の大多数の移民一家と同様、思い描いた夢に近づくことさえできない苛立ちと生きていくのがやっと、という生活苦が招いているのである。

その後のアファーマティヴ・アクション¹³(Affirmative Action) によって変化があったとはいえ、同様の社会状況は貧困層の移民の国籍が変わってきた現在でも大きく変わっていない。オーツの家族を始めとして、低所得の移民やアフリカ系アメリカ人の階層が不満を募らせるのは当然のことで、前節で言及したデトロイト暴動も、そのあらわれである。

デトロイトは暴力と人種差別の街といわれた。自動車産業で繁栄した都市は 1950 年代初めの不景気に見舞われ、白人中産階級は郊外へ逃れた。その結果、中心地は職を持たない（あるいは、持てない）アフリカンアメリカ人及びプア・ホワイトなどが住みつき、スラム化している状態であった¹⁴。犯罪率も高く、まさに、オーツの言う“Murder City”¹⁵であり、彼女はその恐怖を実際に経験している¹⁶。

確かにデトロイトは危険な街であったかもしれないが、それまでニュー・ヨーク西部の田舎町とそこに住む人々の暮らしや心情を綴ってきたオーツにとって、この街の荒廃した都市部と洗練された郊外の対比は興味をそそられる題材となった。田舎の街にはばかり挫折があるわけではない。当時のアメリカ社会では、郊外の住宅地は理想として捉えられたが、たとえ理想の地域であっても、その地域なりの様々な問題があるという現実、オーツは刺激を受けたのであろう。このことは後年、オーツが「だいたい 1963 年から 1976 年にかけての私の作品はデトロイトとその郊外を中心としたもの、あるいは、そこから着想を得たものです。フィクションから歴史的事実を排除するという事は不可能でした。今、振り返ってみるとデトロイトが私に大きな影響を与えて

いました。そして、忘れてはいたけれど、同じように私にとって大事だったバッファローでの子供時代、青少年時代の思い出がよみがえったからでしょう。」(*Visions*, 309)と書いていることから推察できる。オーツの生い立ちと合わせて考えれば、そのような問題はオーツが、執筆の観察対象と痛みを分け合うことのできる共通点を感じるものだったのかもしれない。デトロイト在住当時の1969年に行われた*Time*誌のインタビューを読むと、かねがねオーツは自分の作品に社会的あるいは経済的テーマが多すぎることを指摘する知識人を苦々しく思っていたらしいことがわかる。まず最初に物質的、経済的な問題ありき、と言い切るオーツは「知識層の人たちは考えてもみないでしょう。ずっと下層の経済レベルから身を起し自分の気持ちを露骨なやり方で主張するのがいかに大変かということ。とても難しいんです。とにかく酷い目にあうんです。貧乏しかないのですから¹⁷。」と述べて、底辺の人々に対して社会が無理解であったり目を向けようとしたりしないことを批判しているのである。

以上のことを考えれば、オーツの描く作品世界で描出されるのは、資本主義社会の自由競争の中で起こる、アメリカ社会の混乱や秩序の崩壊を反映していると解釈できる。その自由競争の象徴となるのが、アメリカン・ドリームである。富、名声、成功、権力などを獲得しようとする過程における野望と挫折は、他の多くの作家と同様、オーツにとっても作品の重要な素材の一つである。しかし、アメリカン・ドリームを達成するための障害は高い。換金するための唯一の商品が自分の労働力でしかない賃金労働者にとって、利潤追求をするための潤沢な資本を手にする確率は低いのである。それでも、夢に焦られる人々は利潤追求の競争へと身を投じる。彼らの気持ちを駆り立てるのも、彼らの希望を打ち砕くのも資本主義である。そして、無産階級を生み出し、労働者の利潤の搾取という現象を引き起こしているのも、資産家の元へ富の集中を促進しているのも、資本主義である。概して貧しいものほど挫折に遭い、チャンスも幸運も少なく、夢に手が届くことは稀である。勤勉と天職を説いたプロテスタントイズムは資本主義の発展拡大を確かに促したが、勤勉だけで金銭を獲得できるというのは表層的な楽観主義に過ぎない、ということ私たちの多くは漠然とながらも感じ取っている、あるいは既に悟っているのだ。

今後は、アメリカン・ドリームをキーワードに、*them*(1969)、*Expensive People* (1968)、*A Garden of Earthly Delights* (1967)、*Bellefleur* (1980)を読み解いていく計画である。

¹ Mary Kathryn Grant, *The Tragic Vision of Joyce Carol Oates*. Durham: Duke UP, 1978. 27.

² Greg Johnson, *Joyce Carol Oates: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne, 1994. 62. 以下、本書からの引用はJCOと略記しページ番号を付すこととする。

³ Joanne V. Creighton. "Unliberated Women in Joyce Carol Oates's Fiction." *World Literature*

Written in English, 17 (April 1978) 165-75. Rpt. in *Critical Essays on Joyce Carol Oates*. ed. Linda Wagner. Boston: G. K. Hall, 1979. 148-56. 以下、本書よりの引用は CE と表記し、作者名とページ数を付すこととする。

- ⁴ カサンドラはトロイアの王女。未来を見通す能力をアポロンから与えられたが、その能力ゆえにアポロンの心変わりを見え、その求愛を拒んだ。怒りに燃えたアポロンはカサンドラの預言が人々に信じてもらえないように呪いをかけた。ケイジンは預言者あるいは巫女というような意味合いで用いたのではないだろうか。
- ⁵ Alfred Kazin, *Bright Book of Life: American novelists and Storytellers from Hemingway to Mailer*. London: U of Notre Dame P, 1971. 165-205.
- ⁶ Bellamy, *Conversations*, 18. Joe David Bellamy. *The New Fiction: Interviews with Innovative American Writers*. Urbana: University of Illinois Press, 1974. Rpt. *In Conversations with Joyce Carol Oates*: UP of Mississippi, 1989. 18 以後、本書からの引用は、インタビュアー名の後に *Conversations* と続け、ページ番号を本文中に記すこととする。このインタビューでは、“I wasn’t creating a story but simply recording it, remembering it” と答えて、トランス状態で書いているような印象を与えている。しかし、ジョンソンによれば、この答は、ある種の悪ふざけであったとオーツ本人が認めているそうである。
- ⁷ クレモンズによれば勤務している大学の創作科の学生にも、同様の方法を薦めているとのことである。cf. Clemons, *Conversations*. 4.
- ⁸ この小学校は District School #7, Niagara County, New York. である。母親のキャロラインも同校の出身であり、2003 年に発表された *The Faith of A Writer* には、タイトルとして用いられている。現存はしていない。
- ⁹ Lucinda Franks. “The Emergence of Joyce Carol Oates.” *The New York Times Magazine*, 27 July 1980. Rpt. In *Conversations with Joyce Carol Oates*. Jackson: UP of Mississippi, 1989. 82-94.
- ¹⁰ 粗野で無教養な、男の子たちの悪戯、からかいに対する恐怖心は、成人してからもオーツの心に残っており、そのような人物が作品にしばしば登場する。また、作家自身は当時の生活を思い返し、“A continual daily scramble for existence.” であったと述べている。
- ¹¹ モーニングスター (Morningstar) は、Morgenstern を英語読みにしたと思われる。同様に、母方の名字はハンガリー姓の Bús を Bush に変更している。移民先の国に相応しく改姓することは珍しいことではない。しかし、改姓は母国のアイデンティティを捨て(あるいは秘匿し)新しい国へ同化することの現れであり、その後の人生を生きやすくするためでもあるとすれば、彼らにとっては少なくとも胸の痛むことではなかったろうか。
- ¹² 詳細は、Greg Johnson, *Invisible Writer: A Biography of Joyce Carol Oates*. New York: Dutton, 1998. 13-15 を参照のこと。以後、本書からの引用は *IW* と略記し、ページ番号を記すこととする。

- ¹³ 積極的差別是正措置。すでにケネディ大統領が着手していたが、暗殺後大統領に就任したリン
ドン・ジョンソンが1965年、行政命令を発して始まった。しかし、一部白人は逆差別として
不満を募らせた。
- ¹⁴ 過熱するベトナム戦争によって、政府の援助が減っており、ことに黒人世帯は、ミシガン州の
平均収入の半分以下の収入だった。
- ¹⁵ Joyce Carol Oates, "Visions of Detroit," *Michigan Quarterly Review*, Spring 1986, pp. 308-
311. 以後、引用には Visions と略記し、ページ番号を付すこととする。
- ¹⁶ 人気のない道路を駐車場へ向かって歩いて行く途中、二人連れのアフリカ系アメリカ人に襲わ
れそうになったが、寸前でパトロール・カーが現れたために助かったという経験をしている。
- ¹⁷ Joyce Carol Oates, "Writing as a Natural Reaction," *Time*, Oct. 10, 1969.

引用文献

- Bellamy, Joe David, ed. *The New Fiction: Interviews with Innovative American Writers*.
Urbana: University of Illinois Press, 1974. Rpt. In *Conversations with Joyce Carol
Oates*: UP of Mississippi, 1989. 18
- Creighton, Joanne V. "Unliberated Women in Joyce Carol Oates's Fiction." *World Literature
Written in English*, 17 (April 1978) 165-75. Rpt. in *Critical Essays on Joyce Carol
Oates*. ed. Linda Wagner. Boston: G. K. Hall, 1979. 148-56.
- Franks, Lucinda. "The Emergence of Joyce Carol Oates." *The New York Times Magazine*, 27
July 1980. Rpt. In *Conversations with Joyce Carol Oates*. Jackson: UP of Mississippi,
1989. 82-94
- Grant, Mary Kathryn. *The Tragic Vision of Joyce Carol Oates*. Durham: Duke UP, 1978.
- Johnson, Greg. *Invisible Writer: A Biography of Joyce Carol Oates*. New York: Dutton, 1998.
- Kazin, Alfred. *Bright Book of Life: American novelists and Storytellers from Hemingway to
Mailer*. London: U of Notre Dame P, 1971. 165-205

参考文献

- Bender, Eileen Teper. *Joyce Carol Oates: Artist in Residence*. Bloomington: Indiana UP,
1987.
- Creighton, Joanne V. *Joyce Carol Oates*. Boston: Twayne, 1979.
- Friedman, Ellen. *Joyce Carol Oates*. New York: Ungar, 1980.
- Grant, Mary Kathryn. *The Tragic Vision of Joyce Carol Oates*. Durham, NC: Duke UP, 1987.

S. ターケルの視点からオーツを読む (松尾祐美子)

Wagner, Linda M., ed. *Critical Essays on Joyce Carol Oates*. Boston: G.K. Hall, 1979.

Waller, F.G. *Dreaming America: Obsession and Transcendence in the Fiction of Joyce Carol Oates*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1979.

